

よって「御取替金」の制度のため、本格的な救済制度にはなりえなかったと考えられます。御取替金制度下にあつては、飢饉に直面した最下層部の百姓農民には救済の手が差し伸べられなかったということにもなります。たとえ返済能力のある村落に、隣接する山々が御救山の対象となつたとしても、百姓農民たちが柚子労働に従事し、賃労働者として商業資本や山師たちに隷属していくことには変わりはありませんでした。

各史料(前掲『日本林制史資料』所収)からは、藩が御救山を設定したことによって檜や杉が2~3カ月で切り尽くされてしまい、津軽領内の山々が荒廃したことが窺われます。今度は、藩が資源の枯渇に直面しました。寛政3(1791)年の弘前藩の史料(同前)には、「天明の飢饉以来多くの山が御救山になったが、そのたびに津軽領の山々の木が薄くなっている。山の荒廃が著しくなつたので伐採を

禁止した」という記述があります。また、もう一つ弘前藩の特徴として、同藩は天然更新を主体として積極的な植林をしない政策を森林管理の基調としたことから、飢饉を契機として御救山の施策が大規模な荒廃を一気に引き起こす要因となつたようです。

「天明卯辰日記」(豊島勝蔵編『津軽の飢饉史』所収)という記録があります。その中に、天明3(1783)年の飢饉の時に弘前藩の領外へ逃亡した人たちの言葉が記されています。「この津軽は主なき国である、殿様のいない国である。だからどうやってもここから逃げていく、たとえ死んでもここから逃げたい」という言葉です。人々の怨嗟の声がかんこえるようです。領民の切り捨てという点では、「御取替金」の制度などはまさに「主なき国」の所業であると私には思われてなりません。

(はせがわ・せいいち/弘前大学)

エチオピア・ティグライにおける飢饉の諸相

眞城百華

私は1980年代に飢饉に見舞われましたエチオピアの、主に北部のティグライにおける歴史の研究をしております。私がエチオピアに関心を持ちましたのも、やはりこの飢饉がきっかけでした。

19世紀から1980年代にかけてエチオピアの北部、とりわけティグライは度重なる飢饉に見舞われてきました。エチオピアにおける飢饉は、旱魃による不作が原因で起こると言われます。

またイナゴの大発生によって植物が食い荒らされてしまうということが原因だとされる例もあります。1140年にポルトガル人がエチオピアに来て旅行記のようなものを書いているのですが、そこにはすでにイナゴの害についての記述が見られます。

さらに牛疫が挙げられます。1889年から92年にかけて起こった飢饉の時には、旱魃と牛疫の流行が組み合わさつたために被害が大きくなつたといわれています。これは、イタリアが1890年にエリトリアを植民地化し、本国から牛を連れてきた際に、病気も一緒に持ち込んでしまったことが原因とされています。牛が免疫を持っていなかったために、一説によりますと、エチオピア全体で牛

の3分の1か半分が死亡したとされます。

今回は1980年代の飢饉を取り上げますが、ここではとくに飢饉というものが、政治と密着しているということ、政治とりわけ中央政府との関係に大きく関わっているという話をいたします。

1980年代の飢饉の当時、エチオピアでは軍事政権が成立していましたが、この政権に対する反政府勢力がエチオピア各地で発生して活動を展開していました。その内戦のさなかに起こつたのが1984年の飢饉です。ここでは飢饉が起こつた地域と中央政府の関係のあり方が大きく作用しています。

この飢饉の被害の状況は、その当時内戦状況であつたこともあつて、統計がきちんと取られていません。報道機関や援助機関、そして政府の発表にもかなりのばらつきがあります。たとえば政府発表では被災者は200万人とされていますが、報道などでは800万人以上が被災したともされています。死者数についても100万人と報道されたり、約30万人と言われたり、はっきりしません。また20万から30万人の難民が発生したとも言われま

■ ティグライとメケレ

飢饉が発生した地域のひとつであるティグライは、現在のエチオピアでは最北部にあたります。住んでいる人たちは主にティグライ民族、ティグライ人と呼ばれています。州都はメケレという町で、現在では発展して広大な都市になっていますが、1980年代当時はまだ人口も少なく、商店もあまりないような町でした。

メケレの都市部は建物が密集していますが、その周囲はごつごつとした岩の山がちな地域です。ここは、ほかの地域の住民から「岩と埃の町」と言われるくらい乾燥しています。川などは雨季にはたくさんの水が流れますが、乾季になると干上がってしまい、歩いて渡ることができます。

ティグライは飢饉の多発地帯ですが、それが内戦とどのように関わるのかを考えてみましょう。そのために当時のティグライの情勢の話をします。

エチオピアでは1974年の革命によって帝国が崩壊し、それに代わって軍事政権が成立しました。革命の翌年にはティグライにおいて「ティグライ人民解放戦線」(TPLF)が成立し、後には反政府勢力として力をつけるようになります。

1980年代の飢饉の頃は、このTPLFが政府軍との武力衝突をティグライ各地で展開していった時期にあたります。そして政府とTPLFそれぞれが、内戦中であるにもかかわらずこの飢饉に対処しようとしていました。

■ 政府による支援

一般にはこの飢饉は1984年に始まったとされていますが、ティグライ州の東部と南部のほうではすでに1980年くらいから雨不足による不作の年が続いていました。雨も降らず、牛すらもばたばたと倒れていくという状況が1984年にピークに達し、飢饉の状況が悪化しました。大規模な飢饉ともなれば国際的にも報道がされますし、政府も対応せざるを得なくなります。それとともに、このティグライを支持母体として活動を広げようとするTPLF側も対応を始めます。

このような情勢において、飢饉への対応の中にも政府と反政府勢力の対立が見えます。軍事政府は傘下に救済復興委員会(RRC)という組織を持っていましたが、それにもかかわらず、この1984年の飢饉でも政府の対応は後手に回ってしまいました。

対応が遅れた原因のひとつとして、まずはティグライが内戦下にあったことがあります。反政府勢力側の地域に援助をするということは、敵に塩を送るようなものである、というような意識も一部で働いていたのかもしれませんが、それに加えて、1984年というのはエチオピア革命10周年の年にあたります。祝賀行事を優先させたために、飢饉

への対応が遅れたという指摘もなされています。また、軍事費の増大により支援のための財源が不足していたことも指摘されています。

エチオピア飢饉に対する国際社会の関心が高まっていたため、首都のアディスアベバには支援物資がどんどん届けられていました。しかしながら、それを最北部のティグライにどのように運ぶのかというような問題がありました。また内戦下の反政府勢力地域であったため、人道的な支援を優先するのも難しい状況でした。

■ TPLFによる支援活動

軍事政権が支援をする一方で、反政府勢力側にも被災者を救済しようという動きがすでに始まっていました。反政府勢力というのはとても統率の取れた組織で、指令系統もかなりしっかりしています。TPLFにはさまざまな部門があり、その中にはティグライ救済協会(REST)という機関も設立されていました。このRESTが被災民に対する支援を行う担当部局となります。

しかしながらTPLFの兵士はみな、ゲリラ兵として山野を駆け回って政府軍と戦っていました。私の友人の中には当時ゲリラ兵だった人がいますが、80年代の話を聞くと、野山で獲物を捕まえて食べていたというような話をしてくれます。自分たちが住んでいる地域自体が飢饉に直面しており、TPLFもこの状況に強い危機感を持っていました。

政府は支援物資を送りながらも空爆を続けていました。TPLFとその援助機関であるRESTは、避難民を隣国であるスーダンに安全に送り出すために道路を確保するなどしています。それに加えて、TPLFは軍事政権下で苦しんでいる状況を積極的に国際社会にアピールしていきました。その結果スーダンにある難民キャンプに国際社会からかなりの支援が入るようになり、TPLFを支援する形での援助を呼び込むことに成功しています。

■ 再定住プログラムの実施

政府はティグライに住んでいる人々をもっと自然環境の豊かな、農耕に適した地域に移住させようとしています。これが再定住プログラムといわれているものです。再定住プログラム自体は現在でも行われていますが、当時は今とは違って緊急事態であり、人々をとりあえずトラックに乗せて一気に運んでいくというような、かなり乱暴な措置もとられました。

ティグライでは多くの人々がエチオピアの西部の方に強制的に移住させられました。私が最近聞いたなかでも、強制移住によって家族が離散してしまい父親だけが他地域に行ってしまう、それ以来一度も会っていないという話があります。

条件が整わないなかで人々を強制的に移住させ

ることについては、国際的にも批判が高まりましたし、TPLFもこの政策を非難しています。TPLFにとって強制移住は、支持母体であるティグライ人が連れ去られてしまうことであり、ひいては軍事政権に抵抗する力が弱くなることを意味したからです。

このように、敵対する関係にある双方が行う支援というものは、たいへん異なった性質を持っています。そして、被災民がこうしたプログラムに対してどのように感じていたのかということが、その後の政局にかなり大きく影響しています。ティグライにおいては、飢饉を境にして、それまで以上にTPLFへの支持が拡大します。

1991年にTPLFと国内各地の反政府勢力との連合勢力が、軍事政権を崩壊させ、新しい政権として現在のエチオピアを成立させることになりました。80年代に反政府勢力だったTPLFは、今では政党としてエチオピアの政治の中で活動しています。

現在、RESTはNGOとして国際的な支援の受け皿となり、その支援をティグライ各地に分配する役割を担っています。

■ むすびにかえて

現在も、エチオピアには「飢饉のエチオピア」というイメージが染み付いているように思います。1984年の飢饉の際、日本テレビの24時間テレビが大量の毛布を支援物資として送りました。現在もティグライの自分の調査地に行きますと、「君は日本人だろ」と声をかけられます。聞けば今でも日本のNGOから「毛布は要らないか？」というオファーがたくさん来るということです。「なぜ日本人はあんなに毛布を送りたがるのか」とティグライ人から聞かれてしまいました。

この飢饉の状況というイメージを、どういうふうにして日本で伝え続けければいいのかと思います。ティグライ人自身による活動も行われていますから、現在のエチオピアではさまざまな対応が進んでいます。もちろん今でも気候変動の影響や、和平が覆る可能性がないわけではありませんが、こうした懸念を越えたなかで、現在はさまざまな対応が進んでいるのです。

(まき・ももか／津田塾大学)

生業の破綻をいかに防ぐか

— エチオピア西南部の山地農耕民マロ (Malo) の事例から —

藤 本 武

■ 飢饉＝貧困なのか？

私はエチオピア西南部の山村で住み込み調査をしてきましたが、そこで実感しているのは食べ物が豊富にあるということです。

「食べ物に困った時期があるのか」と聞いても、現地の人は「そういうのは大昔にあったようなことを聞いたことがある」というくらいで、自分たちの経験としてはまったく知りません。彼らはだいたい、毎日4回食べていますが、私がちょっと歩いていると、あちこちから「うちで食っていけ」というふうにしょっちゅう食事に呼ばれます。とくに日曜日にはお呼びが多く、8食から9食くらい食べることもあります。そういうわけで、私には、飢饉や飢饉というものは遠いという実感がありますし、人々もそういう感覚を持っていると思います。

さきほど藤田先生のお話のなかに、世界の65億人の人口のうち8億人が飢饉人口であるとありました。しばしばそうした統計で、エチオピアは真っ先に飢饉人口に組み込まれてしまいます。それから、1日1ドル以下のぎりぎりの生活を送っている貧困層が世界に何億人もいるといったことも言われます。しかし、私が調査しているところでは、毎日の生活でお金をそれほど使わないものの、調査の実感からは餓えているという印象はありません。そのあたりがどういうことなのか、また今日変わりつつあるとすればどうして変わってきているのか、といったことについて話してみたいと思います。

人類の生業は伝統的には狩猟採集、牧畜、農耕と区分されます。農耕民は基本的には農作物を主食にしています。そしてほとんどの農耕民は、主